

公孫樹

東京都立
豊多摩高等学校

令和4年12月

第59号

東京都杉並区
成田西2-6-18
TEL 03(3393)1331



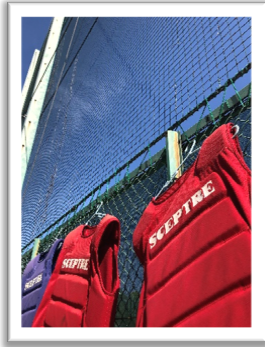
「勝利の価値」

校長 板倉 和則

スポーツの試合を見ていて、「これってフェアじゃないのでは？」と思うことがある。テニスで錦織選手が相手の届かないエリアにリターンを決める。バドミントンで桃田選手が相手の動きと逆方向にスマッシュを打つ。性格が悪いんじゃないの？ などと思う。ルールに違反しているわけでもないのに、なぜこんな感覚になるのだろうか。おそらくは、人の裏をかくようなプレーがズルいという印象を与えるのだろう。

「醜く勝つなら美しく負けたほうがいい」オランダの名サッカー選手(後にFCバルセロナ監督)、ヨハン・クライフの言葉とされる。しかし私は、彼がこの言葉を発言したという事に強く違和感を持った。彼ほど一点を取ることにこだわった選手はいなかったし、勝つことに執着した人だったからだ。真意が知り

たくて、いろいろと調べてみたが、見つからない。もしかすると、この言葉が名言扱いされているのは、日本だけなのか



もしれない。ひとつだけわかったのは、この言葉が試合に負けたときに発せられたらしいということだ。つまり、「負けたけれど、よくやったよ」くらいのニュアンスだったのだろう。さらに、彼の言葉から推測すると、「美しく」は「攻撃的に」、「醜く」は「守りに徹する」という意味だとわかる。「攻撃的に頑張ったから、負けても仕方がない」という意味であって、敗北の美学ではなかったようだ。

リスペクトプロジェクトをご存じだろうか。仲間、対戦相手、審判、指導者、用具、施設、保護者、大会関係者、サポーター、競技規則やゲームの精神などに対してリスペクトするというものとはサッカーのムーブメント。すべてをリスペクトした上で、常に全力を尽くしてプレーすることがフェアプレーの原点であるということ。

競技は勝つことを目的としている。ルールの中で勝つことを競う。ルールは競技者にとって、絶対の存在。ルールがあるからこそ、勝利が価値あるものとなる。ルールがある世界では、遠慮は無用。あ、あそこが空いているけど、打ち込んだら、嫌われちゃうかな……などと考えていたら……負ける。手加減をすることは相手を侮辱することである。余計なことは考えず、相手をリスペクトし、自己のベストを尽くすのみ。ハングリ

ーに勝ちにこだわって、がむしゃらにプレーする。そのことが競技の質を高めるのではないだろうか。

Touch the Sky! TOYOTAMAI

「手書きの力」

副校長 昆野 弘幸

「本校の学友も出展しているので、ぜひ」

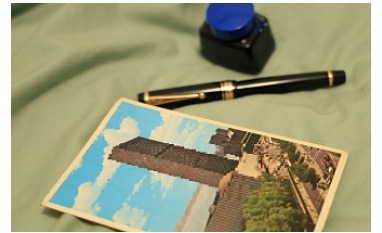
書道の先生からお誘いを受け、先日、東京芸術劇場展示ギャラリーで開催されていた第三十五回東京都高等学校文化連盟書道展に出かけました。会場を埋め尽くすように都内の高校生の作品が数多く展示され、圧巻でした。臨書から独創的な作品まで、書に明るくない私でも高校生の実直で清らかな作風を味わうことができた気がしています。

今日、パソコンやスマホが普及して、文字は「書く」より「打つ」という行為が主流となった感があります。書道展に行って改めて肉筆の妙味を再認識しました。

手書きのよさを感じられる機会として、例えば、誰かから送られた絵はがきを読んだときなどもそのひとつといえるでしょう。今まで友人や知人をはじめ、さまざまな方より手書きによる絵はがきをいただいたしてきました。それらを手にしたときは本当に嬉しい気持ちになったものです。

いただいた絵はがきはどれも思い出深いのですが、ここでは今、手元にある一枚の絵はがきのことに触れます。私が高校一年生のときに受け取った一枚です。送り主は、故國弘正雄先生。國弘先生は英語の同時通訳の先駆けとして、また、人類が初めて月に降り立った一九六九年のアポロ十一

号の月面着陸のようすをテレビで同時通訳されたことなどでも知られた方です。國弘先生とはほんの一時期、ご縁をいただいたことがあったのですが、そのときニューヨークの国連本部から送ってくださったものです。国連本部ビルの写真を図柄とした絵は



がきには、ワルトハイム事務総長（当時）にインタビューできたことなどが國弘先生独特の字で書かれていました。力強い直筆の文字からは、今でも生き生きとした息吹を感じます。送り主の気持ちも。これが手書きの力なのだなと思います。

ついにながら、絵はがきの文面末尾に記されていた日付は「十月二十四日」とありました。国連デーの日付だったのです。このようなところにも國弘先生の心配りを感じました。

「記念祭担当から」

生徒保健部 五十洲 あかね

今年度の記念祭は、二〇一九年以来、三年ぶりに家族の方を迎えて開催することができました。動画作成以外の企画ができるのも三年ぶり。豊多摩生全員が初めての公開記念祭。全校生が記念祭のことをぼんやりとしか分らない中、「過去にこだわらず、できるだけコロナ流行以前の形に近づけて無事に開催すること」が今年度の目標でした。

記念祭実行委員会が発足した四月から、総長・

副総長・各局キャップを中心に、話し合いを重ね、準備を進めてきました。九月の感染状況なんて誰にもわからない、でも準備は進めていかなければならない。もしかしたら中止・規模縮小になるかもしれない。不安に感じながら一学期を過ごしてきました。六月の合唱コンクールを無事に終え、次は記念祭。実行委員たちも、楽しみ・不安・緊張など、様々な感情が入り混じっていたと思います。

夏休み中、記念祭準備期間はとくに、みなさんの記念祭への強い想いを感じました。ポスターや看板、装飾、出展内容には各団体の努力や工夫が感じられ、目標が定まったときのみなさんの勢い・爆発力にはとても感心させられました。これからも目標に向けて努力し続けることができる人でいてほしいと思います。

記念祭当日を迎えるまで、すべての片付けが終わるまでは様々な事がありました。次年度への課題もたくさんあります。担当として最も課題に感じたことは、「各団体、全校生徒一人一人への情報伝達の徹底」です。総長から実行委員、団体代表そして一人一人への情報の伝達がうまくいかず、装飾や会計などのルールを周知しきれませんでした。情報伝達の方法など、工夫が必要だと思いました。同時に、実行委員・団体代表以外のみなさんには、「聞く姿勢」を大事にしてほしいと思います。みなさん一人一人の協力がなくては記念祭をはじめとするすべての行事が成立しません。瞬間を楽しみだけでなく、過程にも目を向け、実行委員・団体代表と一緒にみんなで行事を創り上げていき

ましよう。

無事に開催できた一方で、制約も多く、飲食系の企画をやりたかった、他校の友達を呼びたかった、などみなさんも様々な思いを抱えていると思います。無事に記念祭当日を迎え、大きな事故もなく二日間を終えることができたのは、皆様のおかげです。来年度どのような形で実施できるかはまだ分かりませんが、引き続きご理解・ご協力をお願いいたします。

「体育祭を終えて」

生徒保健部 半田 雅理

台風などで被害が日本中を駆け巡っていた一週間前がウソのように晴れた九月三十日、実に三年ぶりとなる三年生がそろっての体育祭が行われました。仕方がないとはいえ、コロナによる三年間のブランクは、様々なところで弊害をうみ、実行委員の学友も教員も「本当にできるのであろうか？」と思うような状況で当日を迎えました。が、始まってしまえば学友たちは招集場所や自然と陣を組み、仲間を応援し励ます。一つ一つの競技にこれまでコロナ禍でできなかったすべてをぶつけているように感じました。それは一度途切れたかに見えた豊多摩の体育祭の伝統が何の問題もなく復活したと感じさせる瞬間でもありました。

係の学友や先生方も含め、豊多摩にかかわるみんなの力で言うことができた体育祭であったと思います。保護者の方々も含めこの場を借りて感謝申し上げます。ありがとうございました。